

女子学生に於ける色の嗜好性

宮 田 ナ ヲ

Color preference among girl students

NAO MIYATA

人間生活に関する色彩の中で最も大きな流れは被服の上に現われたそれであって、既に色の発生されている材料を利用する上にはその取扱い方が重要なポイントとなり、その取扱い方は時代の動き・国民性・環境・年令・個人の性格によって異なる。また、色は心理的に連想と感情をもつものであるから人が色を選択する場合、その嗜好性が環境によってどのように現われ心理的に動揺の多い年代に於ての変化を調査し考察した結果を報告する。

なお、美しい服装美は構成美と配色美の二つの要素があいまって生じるものであるから嗜好色を被服材料として取扱う場合に満足させこれをもとにして美しい配色を得るにはどのようにすればよいか……との「服装に於ける配色美の研究」への発展の基礎とし美しい個性的な服装美のあり方の指導に役立てたい。

調査対象および方法

対象 長野の高校生 952 名と短大生 140 名（以上長野市）および京都の高校生 694 名と短大生 185 名（以上京都市）の女子（15才より20才）である。なお、長野の高校は女子のみであるが京都の高校は男女共学で同時に調査し女子のみを対象にした。調査の年は長野市のものは1950年6月、京都市の高校生のものは1950年7月、京都市の短大生のものは1958年6月である。

方法 次の要領でアンケートを求める。試料 標準色紙 28 色

アンケート記載事項

1. 年令(満)
2. 現在に於ける嗜好色について次の(1)(2)(3)によっていずれか一つの回答をすること
 - (1) 現在最も好む色を一つだけ記入する
 - (2) ない場合は「なし」と記入
 - (3) 無関心ではっきりしない場合は「わからない」と記入
3. 嗜好色の変化について次の(1)(2)(3)によっていずれか一つの回答をすること
 - (1) 過去に於て好きな色であったが現在好きで

ある色と異なる場合は、かつて好きであった色と、なおまた何年前までその色が好きであったか逆算した年数を記入する

(2) 変化のない場合は「変化なし」と記入

(3) 過去に於て無関心であった場合は「わからない」と記入

整理 先ず、地域・学校別に分け、それぞれの学校で年令別にアンケートの2の(1)について色相別に集計し高率順に1位より3位までの色をあげ、(2)(3)についてはそれぞれの人数を集計して%で現わす。3の(1)については嗜好色の変化のあったものの人数を、3の(2)についても同様にその人数を集計して%で現わし Table 1 とする。更にアンケートの3の(1)即ち嗜好色の変化したものについて分析し「有彩色より有彩色へ変化したもの」をそれぞれの学校で年令別に集計しこれをもとに「暖色より寒色へ変化したもの」と「寒色より暖色へ変化したもの」とに分け%で現わし Table 2 とする。

調査の結果

Table 1 についての考察 現在より9年前の長野市内の高校生では各年令とも「白」が高率を示し、同地の短大生では「黒」が高率である。更に長野高校生と短大生別に嗜好色を色相別に総合集計し高率順に10色あげ比較すると

高校生	白 11.9%	青 9.0%	淡青 7.9%	えんじ 7.4%	紫 5.5%	緑 5.4%	黒 5.3%	紺 4.8%	ピンク 4.0%	グレイ 3.4%
短大生	黒 12.9%	白 9.3%	青 9.3%	紺 7.9%	緑 7.1%	紫 5.7%	えんじ 5.7%	淡青 3.6%	グレイ 2.9%	ピンク 2.9%

である。この短大生は、長野高校生が長野市内および長野市近郊の在住者に限られているのに反し、長野市在住のもの約半と長野県郡部および近県の新潟県・富山県出身で2月ないし1年の長野市内の学校生活を送ったものであることや、年令・教養の差があいまって色の嗜好性の差異となりこのような結果として現われたものと考えられる。

Table 1

		年齢	1位より3位までの嗜好色と%	嗜好色 「なし」%	「わからない」 %	嗜好色変化 「あり」%	嗜好色変化 「なし」%
長野	高校	15	白12.5 青11.1 淡青8.9	1.6	2.3	74.4	6.6
		16	白14.2 青7.8 紫6.8	2.5	2.1	65.5	9.6
		17	えんじ10.5 白・淡青9.4 青8.4	0.7	1.4	72.8	10.8
		18	白10.0 淡青・緑・えんじ8.7 青7.5	3.8	2.5	58.7	15.0
	短大	18	白13.1 黒11.9 青10.7	4.8	5.9	58.3	8.3
		19	黒10.6 緑8.5 紺・青6.4	0	6.4	51.1	17.0
		20	黒30.0 紫22.2 紺・淡青・えんじ11.1	0	0	33.3	22.2
京都	高校	15	緑17.4 白13.0 茶8.7	0	2.2	58.7	17.4
		16	緑13.6 紺11.7 えんじ6.1	1.4	6.5	74.3	17.8
		17	白11.3 青9.5 緑8.6	4.1	5.9	60.6	23.5
		18	紺12.2 白11.3 緑・黒10.3	1.4	3.3	54.3	27.8
	短大	18	青15.7 淡青9.3 白7.9	7.9	9.3	48.7	27.6
		19	青21.7 淡青11.7 紺・茶8.3	0	6.7	43.3	41.7
		20	青・黒・濃緑・グレイ9.5	4.8	0	52.4	33.3

なお、長野短大生の「黒」の嗜好率が高いことについて東京家政学院短大で新入女子学生を対象に1956年2月に調査された出身地域別の嗜好順位を参考にすると勿論調査の年・季節・対象・試料色票数が異なるが甲信越では「黒」(7.4%)が最も高率を示していることを考え

合わせると興味深い。

つぎに、京都の高校生について同様に嗜好色を色相別に総合集計し%で現わし長野の高校生と比較したものがFig. 1である。この結果に現われた大きな差は、長野では6位である「緑」(5.4%)が京都では11.2%で1位で

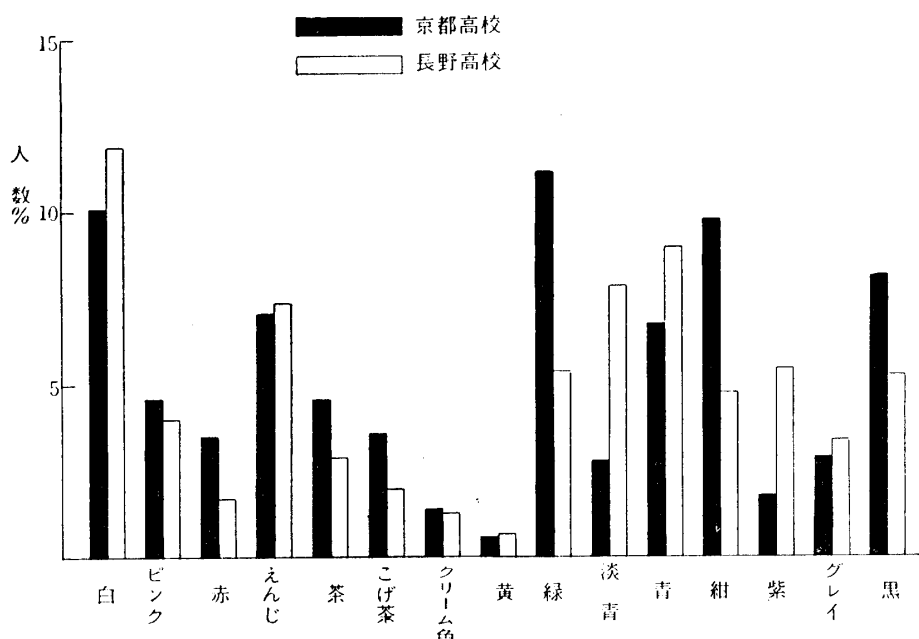


Fig. 1

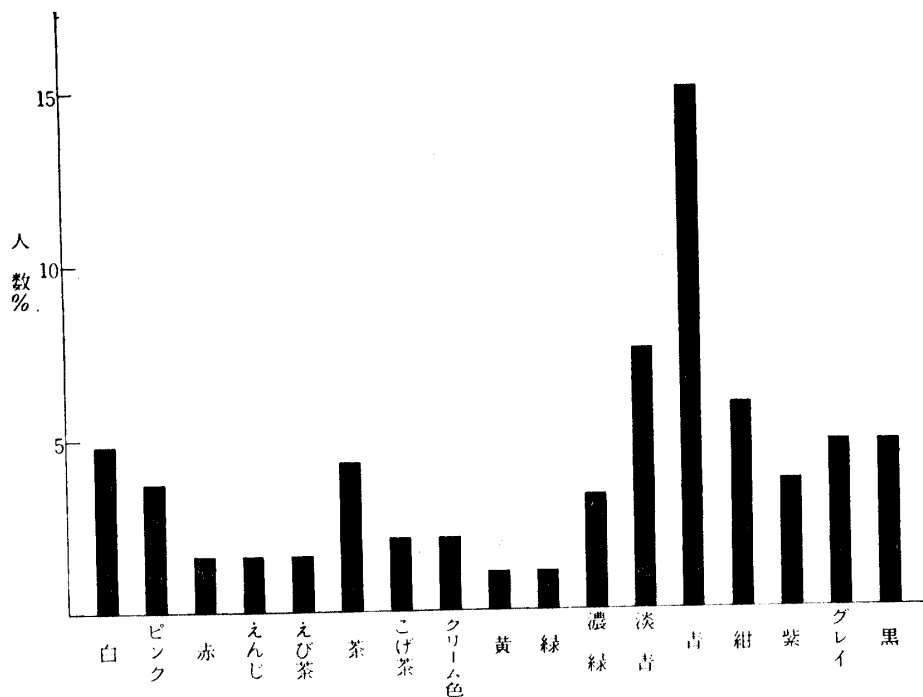


Fig. 2

あり、更に京都では「紺」(9.8%)「黒」(8.2%)「茶」(4.6%)「こげ茶」(3.6%)「赤」(3.5%)が長野に比べて率が高い。この事実は年令・調査の季節が同じであるのもっぱら環境差と考えられるが、これについて京都美大の長崎教授はこれをもって地方色と断定しがたいとの意見である。高校生全体についてみるに黄色の嗜好率が長野高校では0.7%であり京都高校では0.6%と他の色に比べて低いことは宮下孝雄氏調査²⁾による通り小学生では黄色が高率を示し中学生より高校生へと進むにつれて黄色を好む率が低くなるとの結果と一致する。なお、「えんじ」は京都7.1%長野7.4%であり女子高校生の好む色であることがこの調査でも現われている。

つぎに、京都の短大生について同様に色相別に総合集計して%で現わしたものが Fig. 2 である。厳密に言えば、この短大生は京都市在住のものが約 $\frac{1}{3}$ で残りが京都府郡部および大阪市と他近県であるから京都市・大阪市中心とするいわゆる関西に属するものと考えてよい。この調査の結果の特色はブルー系統の色が最も好まれ、流行を超越した色といわれる「黒」の嗜好率が低く「グレイ」「白」と同じであり京都高校での調査で最高率であった「緑」が「黄」と同じく1.1%でクリーム色が「赤」「えんじ」よりも僅かながら高いことである。

こうした事実をもって京都・大阪を中心とする関西としての特色の一端と考えては極論であろうか。なお、先に述べた東京家政学院短大での調査の出身地域別の嗜好順位は関西以西のものでは「グレイ」6.9%「クリーム色」

Table 2

		年令	暖色より寒色 へ変化せるもの	寒色より暖色 へ変化せるもの
長	高 校	15	37.0	8.8
		16	27.2	10.9
		17	21.2	13.9
		18	25.5	23.4
野	短 大	18	36.7	2.0
		19	25.0	8.3
		20	33.3	0
京 都	高 校	15	25.9	3.7
		16	15.7	11.3
		17	23.9	12.7
		18	18.8	19.1
	短 大	18	32.4	13.5
		19	27.0	23.1
		20	27.3	18.2

6.9%「青」5.6%「白」4.2%であって、調査の対象(約一年の東京の学生生活を送っている)と季節の相違および時代の流れの差があり本調査との正確な比較は出来ないが他地方の嗜好をも総合して考え合わせると共通点の一

部を見出せるように思われる。

アンケート 3 の(1)即ち嗜好色の変化の有無についてみると15才より20才の間には「変化する」ことが多く、その経過年数は2年ないし5年が最も多い。これはもっぱら心理的に動揺の多い年代であることと、感受性の強い女子であり急速な世の中の動きにより心理的に刺激を受けこれが色彩感覚に現われたものと考えられる。

最も好む色のないものは長野では高校・短大とも18才に多く、京都では高校の17才短大の18才に多い。また、無関心であるものは長野では高校の18才短大の19才に多く、京都では高校の16才短大の18才に多い。これらの結果には個人の性格・生活環境・年齢等の原因が複雑に関係しあっているものと考えられる。

Table 2 についての考察 嗜好色の変化せるもののうち「有彩色より有彩色への変化」についてだけみても概して青年後期の生長過程では殆どが「赤」を中心とする暖色より「青」を中心とする寒色へと変化するものが多く(京都高校の18才のみ例外であるがその差も僅少)色彩感覚が感情・情緒に連なるものであることが証明される。

む す び

女子学生の色の嗜好性は環境により相違があり、身体的・心理的に変動の多い15才より20才の年代にあっては嗜好色の変化が多いことを知り得た。そしてこの調査は女子学生の一部についてであり、また、色相についてのみのものであるので傾向を知るにとどまったと考えざるを得ないとしても服装美のあり方の一指針を得たと考える。それで今後の課題として残される問題は、嗜好色を被服材料として取扱う場合に基調色とするか、アクセサリ的な配色として用いるかであり、これは環境・個人の性格・流行とも関連し、被服材料の材質および着用者の顔色によっても異なるものであるが以上のような各種条件の一致によってこそ配色美が得られ更に構成美とあいまって個性的な服装美が得られるものとする。

文 献

- 1) 今井, 奥村, 平田, 山田, 東京家政学院短期大学研究年報, No. 3. 1. (1959)
- 2) 宮下孝雄, 色彩学, 光生館

(1959年6月29日受理)